

【コラム3】 領域を超えて改めて得る学び

赤沢真世（立命館大学）

コラボレーション・センターの助教としての私の学びは「領域を超えた学び」という一言でまとめられます。それは、中国や韓国の教育から日本の教育の在り方を客観視することで生まれる「国を超えた学び」と、学校教育現場でのフィールド研究において必要性を感じた「学問領域を超えた学び」という2つの視座として位置づきます。

シンポジウム（「日中韓教育課程・教育評価改革の動向」（2008年7月31日）、「日韓の教育評価改革の行方」（2009年7月31日）では、中国および韓国の教育改革を牽引する研究者を交え、それぞれの国が直面する個別的課題は異なれど、日中韓のどの国ももつ共通性が浮き彫りになりました。日本と同様、中国、韓国においても経験主義的教育か系統主義的教育かの「振り子」現象を回避すべく、諸々の議論や改革が進められています。一方で、中国、韓国の改革の状況を通して、国家的改革のスピードの遅さや改革を現場に浸透させる難しさ、そして教育に関わる予算の少なさなど、日本の教育改革が課題とする側面も明らかとなるものでした。私が専門とする教育方法学（主にカリキュラム、授業実践の改善に関わる分野）においても、教育改革全体を視野に入れて考究する必要性を改めて感じました。

そして、より大きな学びとして得たのは、学校教育現場でのフィールド研究における「学問領域を超えた学び」でした。自身が専門とする教育方法学を軸に、主に「学校教育改善ユニット」として、京都市立高倉小学校や寝屋川市立田井小学校との共同研究を行いました。そこでは、院生が中心となって、例えば、国語や算数等の教科において展開されてきている幾つかの民間教育研究団体による思想および指導方法を紹介したり、教科内容の系統性や学問的意味を提示することで現場教師とともに授業づくりを行ってきました。そのなかで、ともすると、院生（研究者）はそうした教材例や指導方法例が全ての子どもたちにとって「万能薬」となるものだと捉えてしまうものの、授業実践や振り返りを通じて目の前の子どもの学びを丁寧に捉えていくと、そうした「万能薬」は存在しないということを実感して学びました。また授業づくりの軸は「各教師」であり、各教師がそうした各思想や各指導方法を噛み砕き、自身の思想や構想を元として実践を創造していくことを実際に感じました。こうした視座は、実践的な学問領域である教育方法学を専門とする院生や研究者にとって研究の前提であり、不可欠なものであるものの、文献研究では得られないものです。実際に各教師とかわり、その実践を丁寧に見ることでそうした視座を体得する、貴重な経験となりました。

さらに、コラボレーション・センターとして大きな意義を持っているのは、こうした一

つの学問領域(コラボレーション・センターでは「ユニット」)を超えた学びだと考えます。私自身も実際、洛風中学校(「新しい教育関係ユニット」)における現場の先生方と学習の在り方についての懇談会への参加や、野殿・童仙房地域の方々との生涯学習の取組(「教育空間創造ユニット」)、醍醐西小学校の先生方との意見交換から、以下のことを学びました。第一に、それまでの「授業」という一つの枠組みの中だけで考えるのではなく、教育を地域のつながりや個々の子どもの背景をも含めて改めて捉え直す必要があること、そして第二に、簡単に「子どもの実態に応じた指導を!」というものの、子どもの状況は教育現場によって、あるいは個々の子どもによって本当に千差万別であり、だからこそ現場教師は一人ひとりの子どもたちと真剣に、丁寧に向きあいながら教育実践を行っていることを再確認させられました。

実は、こうした「国を超えた学び」、そして「学問領域を超えた学び」の2つの視座は、現代の学校教育現場が抱える多様な課題のため、まさに相互の学問分野・領域を超えた関わりを持つことを目指して設立されたコラボレーション・センターの「コラボ」の意義、そのものであるのです。授業実践の改善においても、子どもの学力向上や教師の指導力向上といった「有能性」ばかりを追い求めるのではなく、その前提やその実践過程ではかならず子どもや教師それぞれの生活経験や生き方、そして彼らを取り巻く地域といった「生命性」を丁寧にとらえていくことが不可欠です。フィールドがますます多様で複雑な課題を抱えていく今後において、フィールド研究にはこうした視座こそがますます求められます。教育実践コラボレーション・センターのこれまでの実績が、そうした「土台」として重要な研究的意義を持ち、さらに展開されていくことを願っています。